頬部に発生した類表皮嚢胞の1例

古田 哲・高井克慈・三原 学
水野和生・石原道郎

A case of epidermoid cyst on the cheek

Tetsu FURUTA・Yoshiki TAKAI・Manabu MIHARA
Kazuo MIZUNO・Michio ISHIIHARA

Abstract: A case of epidermoid cyst on right cheek

The patient was a 35-year old male.

This specimen consisted of mass measuring 3.5×3.5×3.0 cm.

Key words: epidermoid cyst, cheek

はじめに

類皮嚢胞および頬表皮嚢胞は身体各所に発生するが、口腔領域においては比較的少ないといわれている^{1,2)}。わたくしたちが渉猟し得た限りでは、本邦における頬部に発生した報告例は16例で比較的まれと思われる³⁻¹⁶⁾。今回わたくしたちは頬部に発生した比較的大きな頬表皮嚢胞の1例を経験したので、その概要を報告する。

症 例

患 者： 35歳 男性。

初 診：昭和57年10月。

主 訴：右側頬部の腫脹。

家族歴：特記すべき事項なし。

既往歴：幼少時、注射や採血の際にショック様症状をみることがあった。

現病歴：10年ほど前、右側頬部の無痛性腫脹を覚えたが、放置していた。1年ほど前より発育傾向を認めたため、昭和57年9月下旬に某歯科を受診、当科を紹介されて来院した。

現 症

全身所見：体格中等度、栄養状態良好、ほかに特記すべき異常所見は認められない。

愛知学院大学歯学部第1口腔外科学教室

(主任：深谷昌彦教授)

First Department of Oro-Maxillo-Facial Surgery,
School of Dentistry Aichi-Gakuin University
(Chief: Prof. Masahiko Fukaya)

受付日：昭和59年3月5日

局所所見：顔貌は左右非対称性で右側頬部に鶏卵大の腫脹が認められ、周囲に軽度の発赤を認めた。自発痛および圧痛を覚え、硬さは弾性軟、双手診により偽波動を認めた(写真1, 2)。所属リンパ節は触知しない。口腔内は腫瘤相当部の頬粘膜に軽度の腫脹を認め、中央部に咬傷が起因と思われる潰瘍を形成していた。

初診時に試験穿刺を行ったところ、泥様、灰褐色の内容物が吸引された。

臨床診断：頬表皮嚢胞。

処置および経過：同年12月に静脈内鎮静麻酔に局

写真1 初診時正面顔貌

写真 2 初診時側貌

写真 5 嚢胞壁

写真 3 摘出物

写真 6 術後1年正面顔貌

写真 4 摘出物（割面）

所麻酔を併用して、外頬部より嚢胞様腫瘍を一塊として摘出した。

摘出物は $3.5 \times 3.5 \times 3.0$ cm の球状で、色調は灰色を呈していた（写真3）。内容物は泥様および豆腐カス様、灰褐色を呈した（写真4）。嚢胞壁内面は平滑で、厚さは比較的均一であったが、一部嚢胞壁の肥厚が認められた（写真5）。

術後7日目に抜糸、9日目に退院後も経過良好で、術後1年を経過するも再発を認めない（写真6）。

病理組織学的所見：線維組織よりなる嚢胞壁の内腔面には、数層の細胞よりなる扁平上皮があり、その表層には角化が認められた。内腔には角化物を認めた。また皮膚付属器は認められなかった（写真7）。

病理組織診断：頬表皮嚢胞。

写真 7 病理組織所見

考 察

1859年 Röser¹⁷⁾は、類表皮嚢胞および類皮嚢胞を epidermoid tumor とし、同一のものとして報告した。Meyer¹⁸⁾は病理組織学的に検討を加え、嚢胞壁に皮膚付属器をまったくもたないものを類表皮嚢胞、毛髪、毛嚢、皮脂腺、汗腺などの皮膚付属器を有するものを類皮嚢胞に分類し、さらに皮膚付属器以外に骨、筋肉、消化器、血管などを含むものを奇形嚢胞とした。一方、Thoma & Goldman¹⁹⁾によると、類表皮嚢胞は嚢胞壁の内面が重層扁平上皮で被われ、皮膚付属器をまったく有していないか、一部の皮膚付属器を有するものとし、類皮嚢胞は嚢胞壁が厚く、毛嚢や皮脂腺を含み、剝離された重層扁平上皮細胞の角化層の肥厚や細胞性ケラトヒアリンが存在するものとした。両者の分類にはやや相違があるが、現在一般的には Meyer¹⁸⁾の分類が支持されており、石川²⁰⁾、Gorlin²¹⁾も嚢胞壁が表皮と皮膚付属器からなるものを類皮嚢胞、単に表皮の被覆を有するものを類表皮嚢胞に分類し、ほぼ同じ見解を述べている。国見²²⁾は類表皮嚢胞は内圧による皮膚付属器の萎縮したものであり、本質的には両者は同じものであると述べており、類表皮嚢胞は類皮嚢胞の亜型とみなしている。これに対して佐賀²³⁾は、類表皮嚢胞は発生初期から皮膚付属器を欠いていたにすぎないと反論している。国見の説に従うならば、類表皮嚢胞の嚢胞壁は類皮嚢胞より菲薄であり、萎縮所見が認められるべきと思われるが、本症例においても各上皮層に萎縮所見は認められなかった。

頬部に発生する類表皮嚢胞と鑑別を要する疾患には血管腫、線維腫、脂肪腫などの良性腫瘍、炎症性疾患および粉瘤がある。これらのうち粉瘤を除いては臨床所見より比較的容易に鑑別が可能であるとされるが、粉瘤は形態、内容物、壁の組織構造など類似点が多く、しばしば混同される。類表皮嚢胞と粉瘤の鑑別点としては粉瘤は皮膚に関連して発生する腫瘍であり、毛嚢または皮脂腺

の貯留嚢胞であって、一般に皮膚と癒着し、また比較的小さいものが多く、直径2 cm 以上になるものはきわめてまれであるといわれている。一方、類表皮嚢胞は皮下組織内にあって、皮膚とはまったくつながりをもたず、先天性の組織奇形と考えられ、粉瘤と比べて大きいものが多い²⁴⁾。本症例は直径3.5 cm と比較的大きく、皮膚とまったく関連せず、一塊として摘出されたことより類表皮嚢胞と考えられた。

本症の発生機序については今日まで諸説があるが、現在のところ定説となっているものはない。Bergmann²⁵⁾は胎生期の鰓弓癒合部への外胚葉の迷入によるとし、その発生部位について、第2、第3鰓弓間の胎生期裂溝、第1、第2鰓弓の癒合部位、第1鰓弓内において癒合前の両下顎半側部の3つをあげているのに対し、Hassel²⁶⁾は顎洞の残遺物である顎腔の異常埋没によると述べている。また Colp²⁷⁾は、第1鰓弓と第2鰓弓とが癒合する際、外胚葉が中胚葉内に迷入残留することにより生ずるが、一部に無対結節の異常埋没によって発生するとしている。また Franke²⁸⁾、Ackerman²⁹⁾、Anderson³⁰⁾によると先天性の発症因子に炎症、外傷、手術などの後天性原因が加わって発症するとしている。さらに Epstein³¹⁾は迷入した上皮に増殖能があり、炎症、外傷などの何らかの刺激が引き金となって発症するとしている。本症例においては発症部位に、外傷、手術など後天的原因となる既往はないことから先天的なものと考えられた。

本症の実験的発症についての報告は露崎³²⁾、Baker³³⁾、Peer & Paddock³⁴⁾などがある。露崎³²⁾は皮膚、歯肉、頬粘膜の皮下組織への移植縫埋によって、嚢胞発生を認めたが、皮膚付属器を有する皮膚弁の移植縫埋例の方が、他より発育が早かったことから、嚢胞の発育に毛嚢や皮脂腺の関与が考えられると述べている。嚢胞の発育増大については現在のところ Römer³⁵⁾、Euler³⁶⁾の嚢胞壁に強い炎症があって、炎症性細胞浸潤による貯留が起こるという説、Tschistowitsch & Mechteis³⁷⁾らの剝離上皮の分解産物の貯留が液体の浸透を高めるために嚢胞が増大するという説、Fish³⁸⁾の嚢胞腔への持続的な滲出があり、そこに液体が貯留すると、嚢胞内の緊張が増し、嚢胞壁に刺激が与えられ、壁に近接して炎症が起こり、さらに滲出を増すという説が有力視されている。これら3説によると、皮膚付属器の関与がない場合でも発育増大するが、これに皮膚付属器が加わることにより、さらに発育速度が増加するものと思われる。

類表皮嚢胞および類皮嚢胞は全身的には頭蓋、顔面、眼部、口腔、頸部、胸部、腹腔、背部、肛門、骨盤、卵巣、輸卵管、睪丸など身体各所に発生するが、好発部位としてあげられているのは卵巣、肛門、輸卵管などである。New³⁹⁾によると、卵巣(42.1%)、肛門(44.5%)に発生し、頭頸部領域の発生は全体の6.9%にすぎない。口腔領域について玉利⁴⁰⁾の報告した48例中、口腔底35例

表 1 本邦における頰部に発生した頰表皮嚢胞

No.	報告者	発表年度	年齢性別	発生部位	大きさ (cm)	経過
1	松本 ³⁾	1965	65 ♀	両側頰部	米粒大	1年
2	玉利 ⁴⁾	1968	27 ♀	左側頰部	2.6×1.9×1.9	6～7年
3	土井 ⁵⁾	1972	17 ♀	右側頰部	2.6×1.8×2.0	7年
4	関本 ⁶⁾	1972	18 ♀	右側頰部	不明	不明
5	山下 ⁷⁾	1973	60 ♂	右側頰部	拇指頭大	15年
6	船越 ⁸⁾	1974	51 ♂	右側頰部	拇指頭大	8年
7	船越 ⁸⁾	1974	48 ♂	左側頰部	小指頭大	7年
8	姫野 ⁹⁾	1974	34 ♂	左側頰部	拇指頭大	10年
9	石原 ¹⁰⁾	1974	38 ♂	右側頰部	1.0×1.0×0.8	6年
10	松田 ¹¹⁾	1975	41 ♀	左頰粘膜	そら豆大	1年
11	松田 ¹¹⁾	1975	45 ♂	右側頰部	拇指頭大	3～4年
12	宇野 ¹²⁾	1976	60 ♂	左側頰部	拇指頭大	20年
13	久保 ¹³⁾	1977	63 ♂	左側頰部	3.0×2.8×2.8	13年
14	永峰 ¹⁴⁾	1978	25 ♀	右側頰部	拇指頭大	不明
15	坂元 ¹⁵⁾	1981	81 ♂	右側頰部	6.0×5.0×5.0 2.5×2.0×3.0	3年
16	三宅 ¹⁶⁾	1983	31 ♂	右側頰部	1.6×1.5×1.5	約2年
17	自験例	1984	35 ♂	右側頰部	3.5×3.5×3.0	10年

(72.9%), 頰部5例(10.4%), 下顎骨3例(6.25%), 上顎骨2例(4.16%), 鼻部1例(2.08%), 上唇1例(2.08%), 頰部1例(2.08%)であった。頰部に発生した頰表皮嚢胞についての本邦における報告はわたくしたちが渉猟し得た文献では松本³⁾, 玉利⁴⁾, 土井⁵⁾, 関本⁶⁾, 山下⁷⁾, 船越⁸⁾, 姫野⁹⁾, 石原¹⁰⁾, 松田¹¹⁾, 宇野¹²⁾, 久保¹³⁾, 永峰¹⁴⁾, 坂元¹⁵⁾, 三宅¹⁶⁾, の計16例にすぎず, 比較的多いと思われた(表1)。

石川²⁰⁾によると, 本症の多くは先天性発症であり, 幼児期に発見されるべきと思われるが, 好発年齢は20歳前後であり, 特に15～30歳に集中している。本症は一般に無症状に経過し, 発育がきわめて緩慢であり, 青年期になって発見されることが多いためと思われる。また好発年齢が皮膚付属器の発達傾向の著しい思春期と一致する傾向は頰表皮嚢胞, 頰皮嚢胞の双方にみられ, 皮膚付属器を有しない頰表皮嚢胞については疑問を残すものと著者は考える。

全身における発症例の性差について, New¹⁾は男性51%, 女性49%でやや男性に多いと述べている。一方, 口腔領域における発症について, 高橋³⁹⁾は男性43.7%, 女性57.5%, 古本⁴⁰⁾は男性41.9%, 女性58.1%と女性に多いと報告しているが, これに対して, Bhaskar⁴¹⁾, 福田⁴²⁾は性差はないと報告しており, これらの報告を総括すると, 全体的にも, 口腔領域においても, 性差は有意の差はないようである。

頰表皮嚢胞と頰皮嚢胞との口腔領域での発生頻度差については高橋³⁹⁾, 宮脇⁴³⁾は60～65%が頰表皮嚢胞であったと報告している。本邦における頰部での発生16例のすべてが頰表皮嚢胞であり, 発生部位の特徴性を有するものと思われる。

本症の治療法としては外科的摘出が通常で, 本例においても, 一塊として摘出でき, 術後1年を経過する現在, 再発傾向を認めない。

結 語

わたくしたちは, 35歳男性の右側頰部に発生した比較的大きな頰表皮嚢胞の1例を経験したので, その概要を文献的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は, 昭和58年9月30日第28回日本口腔外科学会総会(東京)において報告した。

引用文献

- 1) New, G.B. and Erich, J.B.: Dermoid cysts of the head and neck. Surg Gynec Obst 65: 48-55 1937.
- 2) 大野邦博, 曾田忠雄, 他: 口腔領域の頰皮嚢胞50例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察. 日口外誌 25: 842-847 1979.
- 3) 松本正義: 表皮嚢胞(抄). 皮膚科紀要 59: 324

- 1965.
- 4) 玉利尚之, 馬渡和夫: 左側頰部に発生した頰皮様嚢胞の1例. 日口外誌 14: 106-112 1968.
 - 5) 土井 尚, 谷口幸治, 他: 頰部に発生した頰表皮嚢胞の1例. 日口外誌 18: 384-390 1972.
 - 6) 関本恵一, 大口忠彦, 他: 顎骨を含む全身に多発した epidermoid cyst の1症例. 口科誌 21: 781-789 1972.
 - 7) 山下佐英, 増田敏雄, 他: 皮様嚢胞の11例. 日口外誌 19: 480-487 1973.
 - 8) 船越良一, 川本 強, 他: 頰部に発生した epidermoid cyst の2例(抄). 日口外誌 20: 545 1974.
 - 9) 姫野 宏, 佐藤 匠: 頰部に発生した epidermoid cyst の1症例(抄). 口科誌 23: 255 1974.
 - 10) 石原和弥, 佐々木 徹, 他: 頰部にみられた頰表皮嚢胞の1例(抄). 日口外誌 20: 321 1974.
 - 11) 松田 登, 大久保滋郎, 他: 当科における軟組織に発生した頰皮嚢胞, 頰表皮嚢胞17症例の概要. 口科誌 24: 109-116 1975.
 - 12) 宇野 治, 友沢 基, 他: 左頰部に発生した頰表皮嚢胞の1例(抄). 口科誌 25: 350 1976.
 - 13) 久保四郎, 浅田洗一, 他: 頰部に発生した頰表皮嚢胞の1例. 日口外誌 23: 664-668 1977.
 - 14) 永峰 昇, 岡本全允, 他: 頰部に発生した頰表皮嚢胞の1例(抄). 日口外誌 24: 1005 1978.
 - 15) 坂元晴彦, 林 和江, 他: 頰部に2個の頰表皮嚢胞が存在した1例. 日口外誌 27: 1061-1065 1981.
 - 16) 三宅正彦, 榎本武司, 他: 頰皮嚢胞および頰表皮嚢胞の4症例. 日口外誌 29: 2102-2109 1983.
 - 17) Röser, 萩崎為行: 巨大ナル口腔底皮様嚢腫ノ一例. 耳喉 2: 562-569 1929. より引用
 - 18) Meyer, I.: Dermoid cysts (Dermoids) of the floor of the mouth. Oral Surg 4: 1149-1164 1967.
 - 19) Thoma, K.H. and Goldman, H.M.: Oral Pathology. 8th Ed. Mosby Co, St Louis, 1960, p 924-929.
 - 20) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 第2版, 永末書店, 京都, 1971, 860-862頁.
 - 21) Gorlin, R.J. and Goldman, H.M.: Thomas Oral Pathology 6th Ed, Mosby Co, St Louis, 1970, p 463-465.
 - 22) 国見正明: 口腔底皮様嚢腫の2例. 耳鼻臨 27: 391-393 1954.
 - 23) 佐賀守行: 口腔底皮様嚢胞の1例. 山口医学誌 9: 1613-1615 1960.
 - 24) 相沢豊三, 赤倉一郎, 他: 医学大辞典. 第15版, 南山堂, 東京, 1975, 1389頁.
 - 25) Bergmann, E.: Handbuch der praktische Chirurgie 4auf Bd, Stuttgart, 1913, p 976-978.
 - 26) Hassel, R.: Die Mundboden Dermoide entwicklungs geschichtliche Diagnostisches und Therapeutisches. Beitr Klin Chir 83: 332-351 1913.
 - 27) Colp, R.: Dermoid cysts of the floor of the mouth. Surg Gynec Obst 40: 183-195 1925.
 - 28) Franke, F.: Über Epidermoide (Sogenannte Epithel Zysten). Dtsch Z Chir 40: 197-199 1894.
 - 29) Ackerman, L.V.: Surgical Pathology. Mosby Co, St Louis, 1966, p 99-100.
 - 30) Anderson, W.D.: Pathology Vol 2, Mosby Co, St Louis, 1970, p 1679-1681.
 - 31) Epstein, W.L. and Kligman, A.M.: Epithelial cysts in buried human skin. Arch Dermat 76: 437-445 1957.
 - 32) 露崎孝二: 皮様嚢胞, 表皮様嚢胞の成因に関する知見補遺. 日口外誌 22: 452-469 1976.
 - 33) Baker, B.R. and Mitchell, D.F.: The Pathogenesis of epidermoid implantation cysts. Oral Surg 19: 494-501 1965.
 - 34) Peer, L.A. and Paddock, R.: Histologic studies on the fate of deeply implanted dermoid grafts. Arch Surg 34: 268-271 1937.
 - 35) Römer, G.: Beitrag zur Histologie der Zahnwurzelzysten. Dtsch Mschr Zhk 39: 561-564 1921.
 - 36) Euler, H.: Histologische Studien an Zahnzysten, Dtsch Z M Khr 16: 355-357 1952.
 - 37) Tschistowitsch, T. and Mechteis, J.: Über die Rolle des Epithel in den Wurzelgranulomen. Z Stomat 28: 1163-1166 1930.
 - 38) Fish, 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅰ. 第2版, 永末書店, 京都, 1971, 386頁. より引用
 - 39) 高橋庄二郎, 大西栄蔵: 口腔底皮様嚢腫の2例並びに本邦文献による統計的観察. 歯科学報 52: 62-67 1951.
 - 40) 古本克麿, 北村勝也, 他: 頤部及び舌下頤下部に2コの皮様嚢胞を有する1例. 九州歯誌 13: 341-352 1959.
 - 41) Bhaskar, S.N.: Synopsis of Oral Pathology. 3th Ed. Mosby Co, St. Louis, 1969, p 54.
 - 42) 福田順子, 水野治郎, 他: 顎骨内に発生した epidermoid cyst の4例. 日口外誌 18: 612-616 1972.
 - 43) 宮脇公明: 口腔底に生じた頰皮様嚢胞の1例. 外科 21: 547-550 1957.